

27	田原	田原市立赤羽根中学校	マルヤマ マサフミ 丸山 雅史
分科会番号	7	分科会名	美術教育

主体的に作品制作に取り組み、自分の思いや考えを自信をもって表現できる生徒
～中学3年「自画像 ～私・わたし・ワタシ～」の実践を通して～

1 はじめに

本学級の生徒たちは、日々の授業や行事に前向きに取り組んでいる。しかし、自分が他者からどう見られているのかを気にする傾向が強く、全体の中で自分を表現することが苦手である。美術の授業においても、作品制作に対して関心が高く、素直に題材に向かい、意欲的に取り組むことができるが、表現をすることについては「これでいいか不安」「どう表してよかわからない」とつぶやくなど消極的な様子が見られた。そこで、表現したいものを十分に膨らませる時間を確保し、技能面の不安を軽減して制作に向かえば、自分に自信をもって表現することができるだろうと考えた。

本題材では、自画像に取り組む。中学3年生は義務教育最後の年であり、人生の節目を前に、将来について考えたり、自分の存在意義や友達関係に悩んだり、心が波打つ時期である。そんな時に、改めて自分を見つめ直し自分らしさを考えながら表現していく自画像を制作することは、とても意味のあることだと考えた。

描画材料には、今までにない鮮やかで柔らかな色合い表現でありながら、慣れた鉛筆に似た使用感で多少のやり直しが可能なパステルを選んだ。

本題材を通して、生徒自身が制作の過程やテーマに沿った表現であることを見つめ、「できたこと」や「やりたいこと」を再認識することで、主体的に制作に取り組んでほしい。自分が満足するまで表現を追求し、思いを形にする楽しさを感じてほしい。そして、かけがえのない自分を感じ、自己表現に今までより少し自信をもつことを期待する。

2 目ざす生徒像

前述のような思いから、目ざす生徒像を次のように設定した。

主体的に作品制作に取り組み、自分の思いや考えを自信をもって表現できる生徒

3 研究の方法と具体的な手だて

【仮説1】

構図を考える場面において、今の自分について見つめる工夫をし、描きたい場面を明確にすることで主体的に作品制作に取り組めるだろう。

〈手だて1〉自分の内面を探る時間の確保

- ①マインドマップを用い今の自分を見つめることで、自分らしさを表現できるようなテーマを決められるようにする。
- ②ペア活動でテーマに合った表情やポーズ、構図の模索を行い、タブレットで撮影した画像や制作中の作品をもとに意見交流することで具体的なイメージをもてるようにする。
- ③毎時間の振り返りで作品の写真を撮り、コメントをつけてスライドに蓄積していく。いつでも制作過程の振り返りができ、できたことややりたいことを再認識し、次の制作工程について考えることで、主体的に取り組めるようにする。

【仮説2】

作品制作において技能面での安心感をもてれば、自分の思いや考えを表現できるようになるだろう。

〈手だて2〉基礎的な絵画技法の習得

- ①参考作品の掲示及び鑑賞により、さまざまな表現について知ることで、今の自分に見合った表情やポーズを考え制作にいかせるようにする。
- ②工程に合わせて段階的に絵画技法を学ぶことで、自分の表現したいものを形にできるようにする。
- ③タブレットの画像加工を用いることで、次の制作工程や完成作品のイメージを具体的につかめるようにする。

生徒Aは、マインドマップの制作を通じ、「自分の好きなもの、嫌いなものなど自分についてよくわかってきて本当の自分の姿というものがわかってきたと感じました」と振り返りに記述した【資料4】。

【資料4】生徒Aの振り返り

マインドマップをやって自分の好きなもの、嫌いなものなど自分についてよくわかってきて本当の自分の姿というものがわかってきたと感じました。ずっとまだ本当の姿というものがあってもいいと思うけど今回わかったことを大切にしたいと改めて心に決めて取り組んでいます。

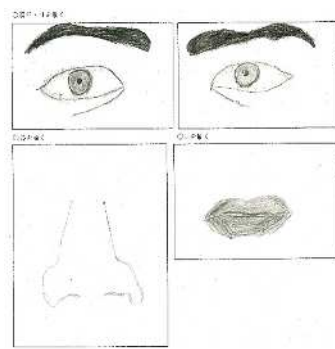
そして、マインドマップをもとに発想し、テーマを「スポーツ観戦で安心感をもって見られるようになった私」とした。部活動に熱心に取り組む普段の様子からは、少し意外なテーマだと感じられた。しかし、マインドマップで今の自分を見つめたことで、自分らしさを表現できるテーマを見つけることができたといえる。

(2) 自分の顔を観察して、外見の特徴を捉えよう

自画像では、自分らしさの表現の追求とともに、外見の特徴を捉えることも大切になる。テーマによりポーズや表情は変化するので、目・鼻・口の角度や形も違ってくる。そうした表情や特徴を捉えるためにも、まずは、顔のパーツの構造を知り、その形状や描き方について学ぶ必要があると考えた。第3時では、目・鼻・口の描き方に焦点を当てて、授業を行った。目は眼球の丸みにより上瞼と下瞼に形状の違いがあること、左右で目の形が違うこと、といった目の構造や基本となる形について学んだ後、鏡で自分の顔をよく観察しながらスケッチに取り組んだ。鼻と口も同様の手順で制作を進めた。

生徒Aの作品【資料5】を見ると、手順に沿って制作を進めたことで、目と鼻についてはおおむね描くことができていたが、口は形を取り切ることができていなかった。振り返りでは「少し違うとやっぱり毎日見ているだけのことはあるので再現が難しかったです」と記述しており、作品の「できたこと」を認めるに至っていないことがわかる。しかし、続きの文に「より一層、自分の特徴を捉えて描いていけるようにしていきたいです」とあり、自分の表現したいものを追求する姿勢がみられた。

【資料5】生徒Aの作品



第4時では、目・鼻・口・眉の位置や角度によって、表情や印象がどのように変化するか具体物を操作することで比較できるよう、第3時で描いた顔のパーツを切り抜き「福笑い」を行った。始めに、表情の変化と顔のパーツの関連性をつかめるように、対照的な表情として、怒っている表情、嬉しそうな表情を作ることにした。目をつりあげると怒った感じになる「目と眉を離すとやさしく見える」といった声も聞かれ、目と眉毛の位置や角度が表情に与える影響の大きさに気づくことができたようである。また、大げさな表情や極端な位置に顔のパーツを配置する生徒も見られた。遊び感覚で取り組めたことで、さまざまな表情をより自由な発想で作ることができたと考えられる。そして、最後に、顔の構造として、目の位置は頭部の約半分の高さであることや、鼻が顔の正中線上にあることなどを伝え、基本となる目・鼻・口の高さや位置の理解を図った【資料6】。生徒Aは振り返りに「色んな表情をつくって見つけることができました。その顔からどんなことがとらえられるか想像したりすることができました」に記述しており、このことから、「福笑い」が、自分が表現したい表情を捉える手だて(2-②)として有効であったと考えられる。

【資料6】生徒Aの「福笑い」



(3) 作品の構想を練ろう

自画像は、鏡に映る自分の姿を見て描き進めることが一般的である。そのため、生徒にとってテーマに沿ったポーズや構図、表情で描くことは難しく、鏡を見る自分の姿(正面からの構図)になってしまいがちである。そこで、自分を写した写真を参考に描き進めることで、表現したい自分の姿を自由な発想で描くことができるだろうと考えた。第5時では、テーマを表現するために構図やポーズを考察し、ペアで撮影を行い画像を吟味していった。

始めに、鏡に映る自身の姿を確認しながら、テーマに合った表情やポーズを探る時間を設定した。鏡に向かってさまざまなポーズをとる生徒がいる中、生徒Aは、じつくりと鏡に映る自分の顔を見つめるにとどまっていた。次に、撮影で気をつける点【資料7】について説明をし、撮影の流れを伝えるために生徒Bとペアを組み、撮影の手順を実演し

【資料7】撮影の留意点

- ・テーマを表現できるポーズや構図であること
- ・顔の表情がわかるようにすること
- ・全身ではなく、上半身で伝わるポーズにすること
- ・同じポーズでも、角度や構図を変えたものを複数枚撮影すること

て見せた。どのペアも複数枚の撮影を行い、生徒Aも、角度を変えた写真や表情に変化をつけた写真を撮る様子が見られた。撮影後は、自画像のテーマに合う表現を追求するために、マインドマップに立ち返り、根拠をもって写真の吟味を行った。ペアと相談する生徒もいる中、生徒Aはマインドマップと写真を見比べ黙々と写真を選んでいった。選択した写真をトリミングする際には、かなりアップにした構図にしており、その理由を「部屋をイメージした」とペアに話していた。トリミングした画像を含め、撮影した写真を確認する中で友達と「これとかいいね」と楽しそうに感想を言い合う姿が見られた。振り返り【資料8】にも自分なりに根拠をもって画像を選択できたと読み取れる内容の記述をしており、納得のいく構図を考えることができたといえる。

【資料8】 生徒Aのスライド



○振り返り
今回自分の写真を取ってみてテーマに沿って自分が一番いいと感じたものを選び切ることができました。自分が思っていることがなかなか写真に出るということは、難しかったです。自分が想像を深めていって表情に出して、今日一番の自分が求めていたものが出せたと思いました。どこか幼さが感じられて、夢中で見ている感じも引き出せたので良かったです。

第6時は、表情を印象づける重要な要素となる目と口などのバランスについて学習した。まず、生徒がわかりやすいように、対照的な表情となるポジティブな表情とネガティブな表情に焦点をあて、描き方の説明を行った。制作は前時に撮影し吟味した画像をもとに進めていった。机間指導の中で、生徒Aから「目が全部黒くなってなんか変になってしまうのは、仕方ないですか」と質問があった。参考になっている画像を確認すると確かに目は全体的に暗く見える。そこで「よく見ると瞳がわかるね、この場合は画像のままではなくわかるように描いていいよ」と伝え、修正しながら制作を進めることができた【資料9】。生徒Aを含め他の生徒も、第3時に学習した顔のパーツの基本的な描き方を生かし、表情による形の変化も取り入れつつ制作を進めていた。次の顔の描画では、意識する点を3つに絞った。①はじめに頭部全体を楕円形でアタリをとり構図を決める②顔の中心を縦に通る仮想の線を正中線と呼び、この線を必ず引く③楕円の半分の高さに横線を引く、これが目の高さとなる。板書で実演を交えながら説明し制作を開始した。特に③を意識して描くことは難しく、あらかじめ引いた横線上に目を描くことができず顔のバランスが崩れてしまうことは多々ある。生徒Aの作品【資料9】からも、横線を生かしていないことや、画面に対し、顔も大きくなってしまっていることがわかる。生徒Aに本時の授業について問いかけると、「難しいです」と答えた。振り返り【資料10】の記述からも、まだ自分の作品を認めるに至っていないことが読み取れる。

【資料9】 生徒Aの作品



【資料10】 振り返り

自分の顔のパーツの特徴をいれて描くことはかなり難しくして苦戦しました。より自分の顔を見て特徴をいれようとしていたけど、もう少しでわよくできるといいです。

第7時には「Chrome 描画キャンバス」を活用し、作品イメージの制作を進めていくことにした。CGの手軽さとレイヤー機能を活用することで、素早く全体のアタリや輪郭線、正中線を引くことができ、作品の全体イメージがつかめたと考えられる。生徒Aは、画像をトレースして描いた全体の輪郭線をもとに作品イメージの制作に取り組んだ。制作の中で何度もタブレットの画像に線や形を描き加え、確認しながら制作する姿が見られた。特に目の位置と正中線に意識を向けていたことが【資料11】から読み取れる。また、制作した作品イメージ【資料12】は、【資料9】と比べて頭部と体の関係性や顔のバランスをとらえて制作できたことがわかる。さらに、「口角を若干上げて楽しんでいる様子をより上げた」からは、その時の気持ちを表すために、口角のわずかな変化にこだわって制作しようとしていることがわかる。このことから、タブレットの画像加工が、次の制作工程や作品の完成イメージを具体的につかむことに有効であったといえる。

【資料11】 生徒AのChrome 描画キャンバス



【資料12】 生徒Aのワークシート



(4) 作品の下描きをしよう

第8時では、本番用の画用紙に下描きを開始した。始めに、前時に描いた作品イメージを観ることで、よりテーマに近づく表現ができるように、修正と加筆する時間を設定した。次に、自分のテーマを表現することができているか、描き方や構図に迷っている点がないか、友達と助言や感想を伝え合う時間を設定した。意見交流は、前時に描いた作品イメージを

もとに、似た構図やポーズで意図的に分けた班で行った。その際、助言がより具体化するように意見交流の流れと併せ、視点となるキーワードを提示した【資料 13】。助言をもとに、その場で作品イメージに加筆する生徒や友達に描き方の助言をする生徒も見られた。生徒Aは、意見交流の中で、テーマを表現するために工夫した点として「一点を集中して見ているので、目つきをよくしました。口角を若干上げて楽しんでいる様子を表現しました」と自分の考えを述べた。「表情から楽しんでいる様子が伝わってくる」「夢中になっている感じが目線や眉毛の形から伝わってきていい」といった友達からの感想を聞き、笑顔になる様子が見られた。改善したい点として、友達からの助言とは別に、「口をもっとリアルに描きたい」とワークシートに記述した。それは、他者からの評価ではなく、自分から作品をよりよいものにしていこうとする姿勢だといえる。次に、意見交流での助言や感想を参考に下描きの制作に取り組んだ。画用紙はタブレットの画面やワークシートと比べサイズが大きくなる。そのままのサイズ感で描かないことと、作品イメージと同じ手順を踏んで描くことも伝えた。描き込む前に修正できるように、その点を意識して机間指導を行った。生徒Aは、しばらく画像を見つめ考える様子が見られたが、全体的に描き進めることで、構図のバランスを取ることができた。振り返り【資料 14】には、友達との意見交流を通じ、「口や表情の描き方の改善点がわかりました」とあり、制作のイメージを具体化できたといえる。また、「納得の行くような作品を制作ができると良い」からは、作品制作に向けて主体的に取り組む思いが読み取れる。

【資料 13】

【友達と意見交流しよう】

- ・ワークシートを並べて、互いの作品を鑑賞しよう
- ・グループごとに ① ② ③ ④ の順番で、それぞれの作品について話し合おう
- ・作品を見せる時は、テーマを表現するために、表情 と ポーズ・構図 で工夫した点を伝えよう
- ・下のキーワードを使い、より具体的に感想や改善点を伝えよう

【キーワード】

- 【表情】
 - ・目（目の表情・視線）
 - ・眉毛（位置・角度）
 - ・口
 - ・頬
 - ・顔の向き（うつむく・上をむく）
- 【ポーズ・構図】
 - ・顔の傾き
 - ・顔の角度
 - ・姿勢
 - ・体の動き（肩の高さ、手の位置や形）
 - ・カメラアングル
 - ・画面に対する人物の大きさ
 - ・余白の使い方

【資料 14】 生徒Aのスライド



友達と良さや改善点などを伝え表情の表現の仕方やこういったところを直すといきたいなど教え合い伝えることができました。これでじぶんは口や表情の描き方の改善点がわかりました。画用紙制作に入っていく中で大きさが変化しただけあるので納得の行くような作品ができると良いです。

第9時では、生徒Aは、前時のスライドを見返しながら目の高さを修正したいと考え、教師に質問した。そして、髪のリズムを増やしたり、顎を少し短くしたりしながら修正に取り組んだ。振り返りスライドを蓄積してきたことで、改善点を見つけ出し、自ら教師に方法を問うなど、主体的な姿がうまれた。その後は、自ら課題とした目と口の描写に取り組み、下描きを完成することができた。振り返り【資料 15】では、「ほんの多少ですが自分の顔に近づいたといってもいいと思いました」「色塗りで今の顔が崩れたりしないように頑張っていきたいです」と記述しており、「できたこと」や「やりたいこと」を再認識することができた。

【資料 15】 生徒Aのスライド



他の人に言われた首の太さ目の位置が高かったことから改善に回しました。そしたら前よりもバランスが良くなってほんの多少ですが自分の顔に近づいたと言ってもいいと思いました。一旦下書きは終わったので色塗りで今の顔が崩れたりしないように頑張っていきたいです。

本題材では、こげ茶と赤茶色の2色のパステルを用いて自画像を仕上げていく。生徒たちにとって初めて扱う画材となるため、第 10 時はパステルの基本的な技法である、ぼかしや、紙やすりで粉を落とす、ハッチングなどの説明を行った。実演の中で、鉛筆と同じようにパステルを消すことができることに驚く生徒も多くいた。生徒たちの反応から、新しい描画材との出会いに意欲の高まりを感じた。

(5) 自画像の制作

今までに学習したことを生かし、生徒Aは、手順通りに赤茶色のパステルを使い鉛筆で描いた線をすべてなぞり、その後、全体を布でぼかした。その後、細部の描き込みや陰影を描くことに取り組んだ。振り返り【資料 16】にも、「自分の姿に光や影をつけたして、より一層リアルな絵を作っていきたい」と記述しており、これからの制作について、自分で課題を設け取り組もうとする様子が見られた。

【資料 16】 生徒Aのスライド



下書きを終えてパステル塗りに入ったらより自分の顔に似てきた感じがしてよりリアルになることがわかりました。自分の姿に光や影をつけたりして、より一層リアルな絵を作っていきたいです。そしてあと改善したいところは目が塗りつぶして変な感じになってしまったので光などを加えながらやっていきたいです。

第 13 時には、再度、第8時の班で集まり、作品について意見交流する時間を設定した。描き込まれ、イメージがはっきりしてきた作品のため、テーマの表現の完成に向け、より具体的な助言や感想を伝え合うことができたようである。生徒Aの振り返りには、友達の助言を参考に目にハイライトを入れたことで、楽しんでいる感情をより表現することができ

たといった内容の記述があり、意見交流を通じて、さらに表現を深めることができたといえる。

第14時で仕上げを行った後、生徒Aは制作途中に目の修正に苦労した様子を振り返った。【資料17】から、最後まで目の表現にこだわりをもって制作に取り組んでいたことがわかる。また「目のハイライトをしっかりとつけたことによって、より自分に近づけました」と記述しており、生徒Aにとって、満足のいく自画像作品に仕上がったと考えられる。

(6) 作品鑑賞

題材の終わりに友達作品の鑑賞を行った。先に4～5人のグループで感想を伝え合った後、クラス全体の作品を鑑賞する流れで授業を行った。グループ鑑賞では、これまでの意見交流と同じように楽しそうに鑑賞を行う生徒Aの姿が印象的であった。全体での鑑賞でも、自然に感想を伝え合う生徒の姿が見られた。最後に自画像制作を終えて、振り返り【資料18】を行った。生徒Aは「口角を上げたり、目に光りを入れたりして人間らしく仕上げるのが出来ました。影を付けたりすることが特に苦戦したけど、首などを中心によく描くことができたと感じました」と記述しており、自画像制作を通して描きたい場面をより明確にしたり、技能面での安心感をもったりしたことで、自分の思いや考えを自信をもって表現することができたといえる。

6 研究の成果と課題

(1) 仮説1とその手だてについて

生徒Aはマインドマップを制作したことで、【資料4】のように振り返った。この記述から、自分らしさについて考えを深め、その気づきをもとに自画像のテーマを考えることができたといえる。生徒Aの【資料8】の記述から、ペアでの撮影を通じて、描きたい場面を明確にできたことがわかる。また、制作途中の作品を持ち寄っての意見交流について振り返った【資料14】からは、次時に改善したい点を具体的に捉えることができたことがわかる。振り返りとして、毎時間スライドに制作過程を蓄積していくことで、自分の作品の変容をいつでも確認することができた。生徒Aは、スライドに改善点や表現できたことについて記述することで、自分の作品を見つめるきっかけとなり、このことが主体的な制作につながったといえる。これらのことから仮説1に対する手だて1-①・②・③が有効であったといえる。

(2) 仮説2とその手だてについて

参考作品の鑑賞を通じて、生徒Aは【資料2】のように振り返った。この記述から、自画像の表現として表情の重要性に気づくことができ、特に目と口の表情に着目していることがわかる。そして、【資料18】の振り返りの記述から、この気づきを作品にいかすことができたといえる。生徒Aは、技能面の不安について【資料13】の振り返りに記述している。しかし、段階的に絵画技法を学んだことで、【資料17】の作品や、振り返りの記述にあるように、自分の表現したいものを形にできるようになってきたと考えていることがわかる。また、生徒Aは、タブレットで写真をトリミングした【資料8】や画像加工した【資料11】を参考に制作を進めた。画像加工を活用することで、次の制作工程や作品完成イメージを具体的にもてたことが、【資料12】以降の制作過程から読み取れる。これらのことから仮説2に対する手だて2-①・②・③が有効であったといえる。

(3) 今後の課題

本研究より、生徒はテーマから描きたい場面を明確にし、主体的に制作に取り組むことができた。しかし、テーマが作品のポーズや構図、表情を決める手段にとどまっており、テーマを表現する理由まで考えが至っていない生徒が多かった。「なぜ今、自分のその姿を描くのか」まで考えを深めることができていれば、テーマと表現をより関連付けた制作ができたのではないかと考える。表現したいという思いをより強めるためにも、マインドマップの扱いや生徒の心を揺さぶるような発問の工夫をする必要があったと考える。意見交流においても、グループによって有効な意見交換ができていたところと、あまりできなかったところの差が生じていた。その様子から、より充実した意見交流の場にするためにもファシリテーターとしての教師の役割の重要性を痛感した。今後も、常に授業改善を試みていくことで、目ざす生徒像に迫っていきたい。

【資料17】 生徒Aのスライド



今回でなんとか完成と行くことができました。自分が工夫した点は、印象の強い目と眉毛です。まず第一に眉毛は実際の濃さが出るようにしっかりと塗って仕上げました。目は、最初は自分の感じがなくて目の形を意識して、目のハイライトしっかりとつけたことによってより自分に近づけられました。

【資料18】 生徒Aの振り返り

自分の事情や表情と種々のポーズをいつでも見ている状態から
こころを込めて描いたりするうちに気づいていきなり描き直したり
よくありましたが、でも自分の写真と見比べて口角を上げたり、目に
光りを入れたりして人間らしく仕上げるのが出来ました。
影を付けたりすることが特に苦戦したけど、首などを
中心によく描くことができたと感じました。